『すがりついていてはいけない』(ヨハネの福音書 20:11-18) 2020.5.3.

＜はじめに＞♪主にすがる我に悩みは無し…と讃美歌にあります(インマヌエル 238 番)。主にすがることはすばらしいことです。ですのに主イエスは、「わたしにすがりついていてはいけません」(17)とマグダラのマリアに言われます。不思議なこの言葉に今日は心を留めます。

Ⅰ　縋り付きたいマリア(11-15)

①なぜ泣いているのですか

主はゴルゴタの丘近傍の園にあった未使用の墓に葬られました(19:41)。マグダラのマリアは朝早く香油を亡骸に塗るために訪れましたが、空いた墓を見て弟子たちに知らせてまた戻ってきました。「なぜ泣いているのですか」と問い掛けられます(13,15)。

②亡骸にこだわる

愛する者の亡骸・墓に生前同様の思いを示すのは自然なことです。亡くなって間もない時期はなおさらです。彼女はだれかが主の亡骸を取って運び去り、どこかに置いたのだろうと思っています。せめて在りし日の主をしのび、慰めを得たかったのでしょう。

③取り戻したい

マリアの本心は、主と過ごしたあの日に帰りたい、でした。穏やかで楽しかった過去に戻りたい、戻してほしいと願いますが、時は戻りません。私たちは主との交わり、主が良くしてくださったことを思い返し、それをもう一度、と思い描きます。しかし、主は先に進まれます。

Ⅱ　すがりついていてはいけません(16-17)

①イエスが分からない(14-15)

振り向いたマリアは、そこに立っておられるイエスを園の管理人と思っていました。この事例は他にもあります(ルカ 24:16、ヨハネ 21:4)。主の復活を受け入れない者ならば当然です。主がここにおられるはずがない、主は亡くなられた、と思い込んでいるからです。

②生ける主の声(16)

主の「マリア」の声に、彼女は「ラボニ(先生)」と反射的に返します。積み重ねて来た主との交わりが、生ける主に気付くきっかけです。主が個人的に語られる経験、御言葉から主の御声を聞くことは、復活の主イエスを体験的に知ることです。知識以上の理解です。

③すがりついていてはいけません(17)

以前のように現れた主を見て、また以前に戻れるとマリアは期待したでしょう。しかし主は、これまでとは違う、新しい関係へと導かれます。物理的・実際的に共にいて、顔と顔を合わせて語らい、触れ合える関係に、主と私たちを留めようとしてはいないでしょうか。

Ⅲ　父のもとに上る(17-18)

①父のもとに行く目的(ヨハネ 14:16,15:26,16:7)

十字架を前にして、主はご自分が父の御許に行くことを明確に語られました(13:1)。弟子たちはよくわからずに悲しみましたが、彼らが喜びに満たされるご計画です(16:17-33)。主が行かれるのは、もう一人の助け主である真理の御霊を彼らに与えられるためです。

②もう一人の助け主

この御方は、①いつまでもともにおられ(14:16)、②信仰者の内に住まわれ(14:17)、③内住の主を示し(14:20,15:26)、④御言を思い起こさせ(14:26)、⑤世の誤りを示し(16:8)、⑥真理に導き(16:13)、⑦将来起こることを告げ(16:13)、⑦主の栄光を現します(16:14)。

③わたしの兄弟たち

もう一人の助け主なる御霊が信仰者に与えられるなら、もはや物理的制限なく、いつどこででも主と語らい、主の思いを受け取り、主の助けを得ることができます。信仰者を「わたしの兄弟」と呼ばれたのは、私たちが小さなキリストとして整えられるのです。

＜おわりに＞ これまでの主との交わり、信仰生活が許されない環境に置かれている私たちが元に戻ることだけを求めてはいないでしょうか。主は弟子たちを新しい関係、「あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望み」(コロサイ 1:27)へと導かれています。(H.M.)